

葉面散布で果樹の花芽肥

花芽が分化するか、葉芽が分化するかは、その枝の炭素率（C/N比）に左右されると考えます。科学的な根拠はないですが、私のイメージとしてはC（炭水化物）とN（チツソ）の割合が8・2くらいで直花の花芽ができる。7・3だと有葉花。6・4とか5・5だと葉芽になる。

つまり、相対的に炭水化物量が多いと花芽ができて、少ない葉芽になれる。逆にいうと、チツソ量が多いと葉

にある枝は光合成が活発でCの量も多
いけど、馬力もあるからNも多くて花
芽がこない。一方、樹冠内部の細枝な
どは、日陰でCの蓄積が少ないので、
馬力もなくてNの量もわずかなので、
直花が咲いたりします。

隔年結果が起ころる樹を考えてみまし
よう。裏年のときは果実にCをとられ
ないから、その分枝にたくさんCを送
り込める。でも、もともと馬力(N)
が少ない樹なので、翌春は直花がびつ
りとつく。次の表年になると、今度

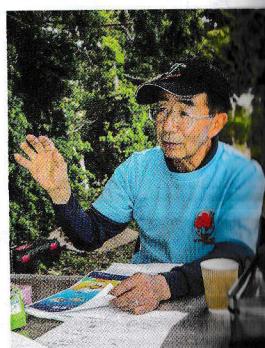
枝のC/N比を見る指標

ミカンの花芽分化は8月には始まっていますが、もっとも重要な時期は10～11月です。この頃の枝のC/N比の状態で花芽になるか、葉芽になるかが決まる。

私は9月の時点では樹の状態を見る。

Cが蓄積されているかどうか、花芽がもつていかれてしまい、花芽がこなくなる。こうして表年と裏年がはつきりするサイクルに陥ってしまうんです。

枝のC/N比を見る指標



瀬片元治さん（61歳）。農業指導員を経て、肥料販賣社の営業職で全国のミカン地を回る。現在は退職し、カン1ha、デコポン13aを接種（赤松富仁撮影 A.1)

これらは果実の食味向上においても、ほぼ共通します。

花芽の栄養にアミノ酸だけではなく核酸も補給するのは、アミノ酸のプロリノン（花粉の主成分で、雄しべや雌しべの形成に必要）と核酸のウラシルが捕うと、花芽の充実に相乗効果を發揮するという試験結果があるからです。トマトなどの果菜類でのデータですが、どちらか単体よりも両方あつた場合に着果数と果実重量が著しく向上したようです。

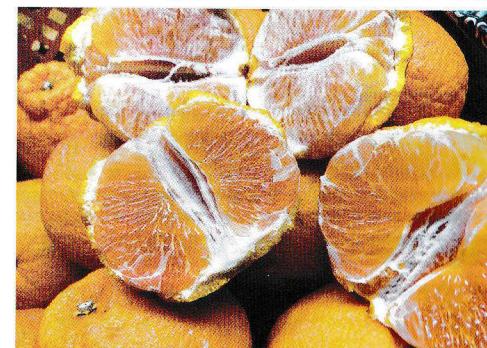
また、味覚においてもアミノ酸と核酸が捕つた場合に相乗効果が出て、アミノ酸単独での旨みと比べて7倍近く敏感に感じられるようになるそうです。

葉面散布でもアミノ酸資材だけではなく、核酸も意識して選んでみると好影響があると思います。私は核酸を含むファーマン1000倍（酵素の世界社）を、アミノ酸資材に加えて使っています。

また、発芽量が増える分だけ肥培管理も併せて考え直さないといけません。花芽分化の箇所には地上部への葉面散布でC（炭水化物）の生成をフォローしつつ、収穫直後に低温でも速効性のある硝酸態チツソを土壤にまいてN（チツソ）の成分量も確保していくます。私は硝酸カルシウム（硝酸態チツソ15%、カルシウム26%）を収穫直後と発芽展葉期に、10a約40kgずつ使

水化物の多くを葉にためて越冬するため、収穫直後にせん定をしそぎないようにもしています。基本的には裾部と内部程度にとどめ、生理落果が終わつたころにまたハサミを入れるようになります。

発芽量が増える分
チツソも増やす



当農園の不知火。昨シーズンは初めて年内に糖度20度を超えた。4月で最高26.9度を記録。30度超えを目指す

なお、核酸は平たくいえばアミノ酸に糖とリン酸がくつづいたもので、細胞分裂の材料にもなる成分です。

直花



前年に伸びた枝の葉の付け根に着花

有葉花



当年の春に展葉して伸びた先端に着花

対処法は尿素と、リン酸・カリ・マグネシウムを含んだ資材の葉面散布です。早生品種の着色が8割程度になつた頃（10月下旬）から2週間に1回のペースでまいていく。チッソが効きます。着色が悪くならないよう、尿素の倍率は2000倍と薄くする。これは

これら三つのうち一つでもヤバイ要素があれば、枝のC/N比は低くなっています。

尿素を薄く2000倍で

①春芽の数が少ないとヤバイ。来年の結果母枝が確保されていないから。
②着果量が多いとヤバイ。果実にじの

ちゃんとできそうかどうかを判断する。

そのときの指標は、以下の三つ。

③気象庁の日照量を調べて、9～10月の日照量が平年と比べて少ない予想だとヤバイ。光合成の絶対量が足りなくななるから。

多くをもつていかれているから。

③気象庁の日照量を調べて、9～10月の日照量が平年と比べて少ない予想だとヤバイ。光合成の絶対量が足りなくななるから。

浮き皮の防止にもつながります。尿素はチッソ肥料だから、樹にNを与えることになりますが、疲れた樹への栄養補給になり、光合成量がアップして結果的にはCが増える。

リノ酸・カリ・マグネシウム補給には、ロイヤルインダストリーズの「色一番」3000倍+「マグミーFe」1000倍を加えて散布するといい。これを収穫直前まで続けます。その後も落葉防止、寒風対策として、尿素は500倍と少し濃くし、その他の成分は

秋のお礼肥はほどほどに

ちなみに、極早生品種は放つておいても毎年花芽がつきやすい。10月には収穫してしまふからです。花芽分化の大変な時期には着果負担が軽くなつて、光合成で得たCを枝に分配できる。よって、枝のC/N比が上がりやすすい。

それと注意点として、秋のお礼肥はほどほどにしてください。収穫するときに、枝を切つていますよね。切つた刺激で枝にジベレリンが発生します。ジベレリンは栄養生長を強める植物ホルモンで、樹体内ではチッソ濃度を高める作用がある。そこに、礼肥でさらにチッソ肥料をやると、余計に花芽がこなくなるからです。

（談）

編



植え付け2年目の幼木の枝（4月末）。昨秋は天候がよく枝に炭素が十分蓄積されているが、アの枝は太くて上向きで力があり、チッソが効いているので葉芽が出た。イの枝は少し細くて斜めに向いてるので、花芽が出た（A）

誕生してから70年！ 肥効促進・調整に！

微生物応用土壤改良資材

バクタモン

土の中でコツコツとしっかり働き
土壤環境や微生物相のバランスを整えます！

最適な環境保全型資材を創造する
岡部産業株式会社
TEL: 0795-42-0386 FAX: 0795-42-5207
e-mail: okabe@bakutamon.co.jp
<http://www.bakutamon.co.jp/>



詳しくはHPで
バクタモン 検索

土壤への効果

- 有機物や肥料の分解
- 地力の安定と肥効調整
- 土壤病害の回避
- 過剰窒素の抑制と調整
- 肥料の流亡・揮散防止
- 不溶性リン酸・カリの活性化
- 硝酸態窒素の残留抑制
- 土壤の緩衝能アップ

作物への効果

- 作物の生長促進
- 耐病性強化
- 発芽・発根促進・根量増加
- 含糖率・含澱率・秀品率の向上
- 連作障害を抑制
- 節間短縮・熟期促進
- 収量アップ